

「学びの共同体」の学校づくりを通して 一人残らず質の高い学びを保障する(安心と夢中の学校づくり)

1 「学びの共同体」の学校づくりについて

1) 「学びの共同体」の学校とは

子どもだけでなく、その成長を支える保護者（地域住民）や教師も共に学び育ち合う場としての学校のことです。

2) 「学びの共同体」の学校づくりのねらいは

1 人残らずすべての子どもが楽しく学べること、すべての教師が教育の専門家として成長できること、保護者や市民も学習参加などを通して学校教育に協力しながら学び続けることです。

3) 学校づくりを行う方法は

授業研究を軸として、子どもの学びを大切にしながら学校づくりを進めます。なぜなら、どの子どももよりよい自分になりたい、そのために未知のことを学びたい、という希望をもっています。それを実現するために最も多くの時間がかけられているのが「授業」です。子どもたちが安心して学べる授業をつくる努力をし続けることが、学校における日常の営みの中心であるべきと考えるからです。



2 「協同的な学び」について

4) 「協同的な学び」とは

自分からはたらきかけて友だちやモノ（資料やテキストなど）と関わり、仲間と聴き合いながら学んでいくことです。いわゆる「勉強」が自分1人による学習で、友だちやモノとはあまり関わらず「一人ががんばる」ことが重視されてきたのに対して、協同的な学びは協同で課題に挑戦しながら自分の力を高めていく学習です。

5) 今、「協同的な学び」が必要な理由は

これからの社会では、人と適切に関わったり、チームを組んで仕事をしたりすることがますます大切になります。ですから、自分からすすんで他と関わり、異なる考えから新たな発想を生み出すような学び方が求められているのです。

6) 「協同的な学び」のねらいは

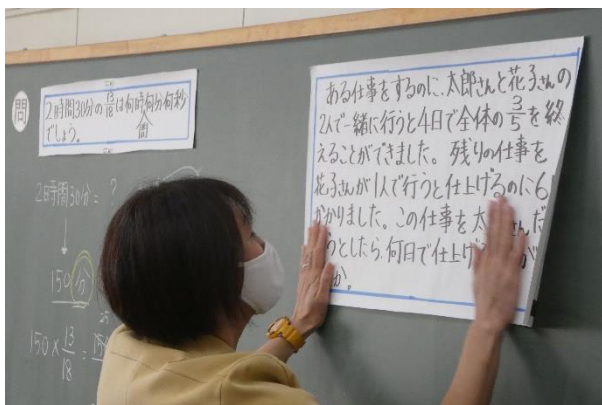
わからないことや困難に出くわしたときに、誰かが助けてくれるのを待つのではなく、自分から他にはたらきかけて支援や援助を引き出す力を育てること、協同的な学びを通して、よりよい人間関係を築くことです。人間関係がよくなると子どもは安心して学べる（わからないと言える相手がいる、自分の居場所がある）ようになります。友達の力を借りながら、納得いくまで学び続けることができるようになった結果、学力の向上も確実に得られます。このよい循環によって、人間関係や学力の一層の向上や、自己有用感の高揚を図ることをねらいとします。

7) 具体的な方法は

じっくり考えないとすぐには答えが出ないような課題、自分1人の力では解決できない課題について、教科書やそれ以外の資料（具体物や実生活に関連するもの等）を使って考えていきます。1人ではできない課題ですから、友だちの考えを聴いたり自分の考えを友だちに伝えたりしながら解決を目指して挑戦していきます。

8) 高い課題に取り組ませることでなぜ確かな学力が身につくのか

基礎から積み上げていくことも内容によっては必要です。しかし、すべてがそのように習得されるわけではありません。また、どの子どもも基礎から順番に学んでいくとは限りません。あまり学習に意欲がない子どもほど「積み上げ式」には苦手意識をもち、興味深い課題にチャレンジするほうが意欲的になります。また、誰かに説明しようとして、実はあまりよく理解していなかった自分に気付き、改めて基礎基本にもどるチャンスが生まれます。そこで、考える力や表現する力を必要とする、いわゆる「高い課題」にチャレンジし、発展的に学習することで基礎も身に付けていきます。



3 授業のすすめ方について

- 9) わからないときは「ここどうするの?」「教えて」と友だちに言います

学ぶということは、1人ではできないことができるようになることです。1人でできてしまうことは、学習の確かめにはなっても新しい学びとは言えません。ですから、どの子どもにとっても、1人でできないことに挑戦することが学びと言えます。1人でできないことに出くわした時に、誰かが助けてくれるのを待つのではなく、自分からすすんで他にはたらきかけて、支援を求める、意見を求める、自分の考えへのコメントを求めることが、豊かな思考を展開したり、身に付けたりする力になります。つまり、他に依存することが、一人で考えられなかった子どもでも自分の考え方や学び方を身に付け、「自立」していく力になるのです。

- 10) 友だちから「教えて」と言われた子どもは、友だちが納得するまで教えます

わかったつもりでも、誰かにわかるように説明するのは容易ではありません。友だちから説明を求められると、自分の理解したことをもう一度言葉にしたり図で表したりする必要に迫られます。そこで、自分の理解が浅かったことや誤解していたことに気づいたり改めて理解を深めたりするチャンスが生まれるのです。

- 11) 「協同的な学び」では、先生は子どもと様々なものをつなぎます

授業の中では、子どもたちにより深く学ばせるために様々な配慮をしています。子どもが学ぶ姿を観察しながら、子どもと子どもの関わりを促したり、教科書や資料を見るように伝えたり、活動を止めて課題を確認したり、ねらいに迫る発言や疑問を取り上げて他の子どもたちにも考えるよう促したりします。先生は答えややり方を積極的に教えることはありませんが、本時の学習のねらいへの迫り方や学び方を「教える人」であり「学びを深めるためのコーディネーター」でもあります。

- 12) グループは男女混合の4人グループで構成します

誰もが学べる最適な人数が4人だからです。それより少ないと考えの多様性が少なくなり、それより多いと活動に参加できない人ができてしまいます。4人は、必ず学習に参加できる人数、言い換えれば、参加しなければならない、遊んではいけない人数ということになります。各学級では、できるだけ男女混合の4人グループをつくるようにしています。

- 13) 小学校1年・2年では、ペアでの活動を中心に学びます

小学校2年生までは、先生とつながっていたい、先生に認めてほしいという気持ちを強くもっています。ペアで学び合いながらも、子どもは先生とつながっていることで気持ちが安定します。学年が進み、ペアの友達以外の考えを聞きたくなってきたら4人グループを導入していきます。



14) 全体で表現を共有するときには机をコの字型にします

教師を含めたクラスの全員が話し手にも聴き手にもなるのが協同的な学びの授業です。お互いの発言を聴き合うために最も都合のよい形が「コの字型」の机配列ということです。

15) 先生は授業中静かに話します

教師が大声で話せば話すほど、子どもたちは話を聞かなくなります。語りかけるように静かに話すと、子どもたちは落ち着いて耳を傾けます。子どもたちが発言するときも同じです。発言者は自然な声量で話し、聞き手が耳を傾けてわかろうとして聴くようにしていきます。

16) グループ学習のときの先生の役割は

先生が個別に指導して回るということではなく、協同的な学びをコーディネートしていくのが教師の役割です。決して「教えない」ということではありません。

